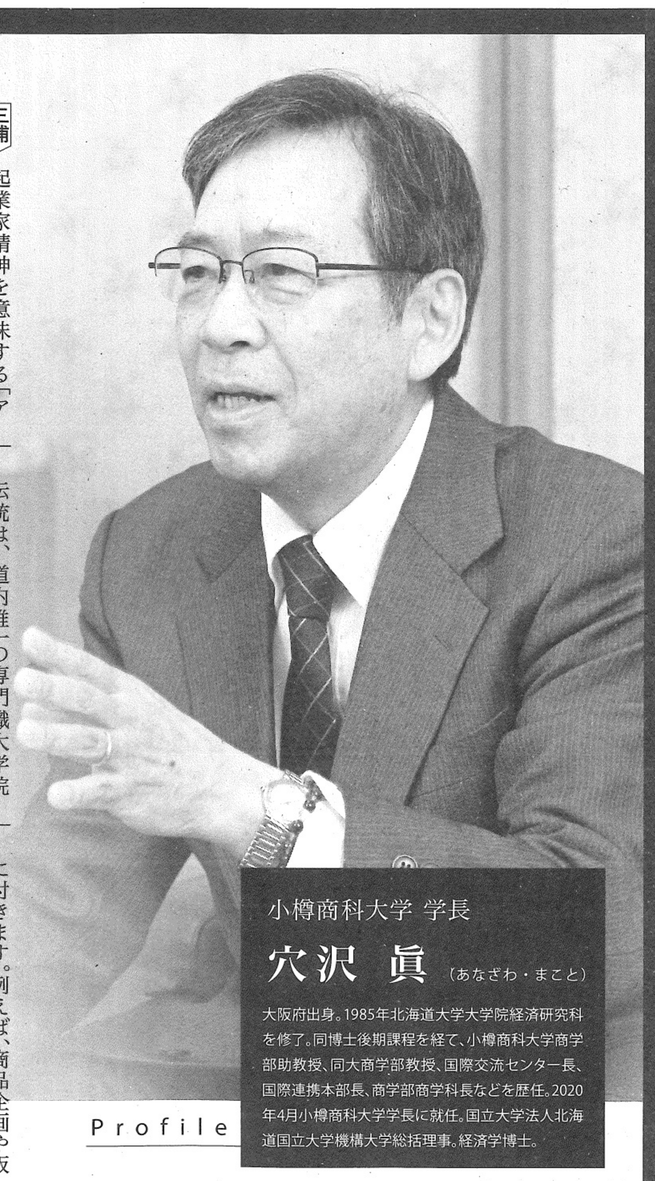
地域と共に、変革期の社会を切り開く

常識や既成概念にとらわれない挑戦を支える、小樽商科大学のアントレプレナーシップ教育

建学以来の「実学重視」の伝統を受け継ぎ、生きたビジネスの現場に触れる授業を行っている小樽商科大学。大学での学びと社会での実践を段階的に積み重ねて、地域や社会で活躍できる人材の育成を目指す本学では、道内でいち早く自らの課題を発見し、新たな価値を養う「アントレプレナーシップ教育」に注力してきた。

アントレプレナーシップ教育の意義や同大の取り組み、描く教育ビジョン、今後の展望などを穴沢眞学長に聞いた。

（聞き手／北海道新聞社執行役員営業局長 三浦 辰治）



小樽商科大学 学長
穴沢 眞（あなざわ・まこと）

大阪府出身。1985年北海道大学大学院経済研究科を修了。同博士後期課程を経て、小樽商科大学商学部助教授、同大商学部教授、国際交流センター長、国際連携本部長、商学部商学科長などを歴任。2020年4月小樽商科大学学長に就任。国立大学法人北海道国立大学機構大学総括理事。経済学博士。

Profile

三浦 起業家精神を意味する「アントレプレナーシップ」という言葉を最近、教育の世界で聞く機会が増えてきました。

穴沢 アントレプレナーシップは起業家精神と訳されることが多いですが、それだけではこの言葉の本質を捉えていないように思えます。本学ではアントレプレナーシップを、失敗を恐れずに行動を起こすことや、常識や既成概念にとらわれない挑戦をすることで、現状を打破し、新たな価値や革新を創造していくマインドや能力のことだと考えています。起業を目指す人だけに必要な教育ではなく、どんな仕事に就いていても、どんな組織に所属していても、今後の人生を切り開いていくための大きな力になるものと信じています。

三浦 小樽商科大学におけるアントレプレナーシップ教育の歴史は古いですね。

穴沢 本学は1911年の開学以来、教育のモットーを「実学・語学・品格」としてきました。専門分野の知識と幅広い教養を養い、その上で体験によって実践的スキルを磨くことを実学教育と考えています。

実学を重んじてきた本学は、社会人に広く門戸を開こうと1992年に大学院に「社会人特別選抜」を設置するなど、社会人教育に力を入れてきた歴史があります。その伝統は、道内唯一の専門職大学院「商学研究科アントレプレナーシップ専攻（通称・小樽商科大学ビジネススクール＝OBS）」を2004年に開設することにつながりました。

三浦 東北以北で唯一、国立大学でMBA（経営管理修士）が取得できる専門職大学院であるOBS。開設から20年、多くの修了生が北海道経済界の第一線で活躍されています。

穴沢 アントレプレナーシップ専攻という名には、小樽から新しい事業を創造し、北海道経済をけん引する人材を輩出したいという思いが込められています。講義は教員が一方的に知識を伝えるのではなく、実在の企業を例に課題や解決策を複数で協議しながら探る「ケース・スタディ」など、教員と学生、また学生同士が活発にディスカッションする場を提供しているのが特徴です。在学生は起業を志す人だけではなく、職業も年齢もさまざまで、ほかでは得ることのできない物の見方や考え方を学びながら、多くの人脈も築ける貴重な機会となっています。

三浦 学部生に向けたアントレプレナーシップ教育について教えてください。

穴沢 学科の講義やゼミなど理論を学ぶ場、ビジネスを実践する場を往復し、繰り返すことで真の実力が身に付きます。例えば、商品企画や販売先の開拓など企業や官公庁、地域の人たちと関わりながら、企業などの実務をそのまま実践するゼミ活動があります。まず理論と事例を研究し、次に調査や実地見学で「現場で起こっていること」を知り、最後に研究で得た知識の実践を試みます。ゼミ活動が発展して起業に至るケースも多く、大学としても起業活動ができる起業サポートルームを作るなど積極的に支援しています。学部生による経営者としての活動が促進されたこともあり、2023年度に経済産業省に報告した大学全体の大学発ベンチャー企業数（学部・大学院含む）は18社に増加しています。

2022年4月、本学は帯広畜産大学、北見工業大学と経営統合して新たな国立大学法人「北海道国立大学機構」を発足させました。各大学が得意とする商・農・工分野の教育や研究を融合し、北海道経済への貢献を目指すものです。3大学経営統合に伴う学びの連携の一つとして、本学のOBSの教育ノウハウと産学官のネットワークを生かして、2023年度より副専攻に相当する「アントレプレナーシッププログラム」を導入しました。これまで以上に、多様な地域課題や企業ニーズを取り入れた教育プロジェクトをカリキュラムに組み込んだ、実践的な教育を提供していくつもりです。

三浦 道内6大学の学生が新たに事業プランを考える講座「北の六大学」も開いていますね。

穴沢 この講座は事業立案を通して課題解決力を養うのが狙いで、2015年度から本学と帯広畜産大学や北見工業大学、公立はこだて未来大学が共同で始め、2022年度から室蘭工業大学、北海道情報大学が加わりました。同年には音更町で合宿を開き、6大学の学生たちが地元企業などを視察して得た経験を生かし、若者らしい視点から事業案を練りました。この有意義な時間が財産になれば、社会に出ても面白い発想が出てくると期待しています。

三浦 高校生に向けたアントレプレナーシップ教育にも力を入れていますね。

穴沢 社会を変える、世界を担う人材を北海道で育成することを目的として、北海道経済産業局との連携事業「No Maps イノベーションキャラバン」を、2017年度から全道各地で展開しています。これは高校に北海道の起業家や経営者を派遣し、地域課題や新規ビジネスの創出などについて講演やワークショップを行うものです。

また、本学は北海道大学などと起業家育成に取り組む産学官組織「北海道未来創造スタートアップ育成相互支援ネットワーク（HSFC）」に参加していますが、HSFCの取り組みが起業家育成を支援する文部科学省の事業に採択されたことを受け、連携協定を結ぶなど本学と交流のある自治体の高校での出前授業を始めています。本学の教員や学生が講師を務め、地域の課題解決や活性化をテーマにした課題探究学習を行なっています。3月3日には、過去に出前授業を受けた生徒などを対象に、「高校生アントレプレナーシップサミット」を北広島市のエスコンフィールドHOKKAIDOで初めて開催し、同球場に高校生を呼び込む方策を考えてもらいました。

三浦 小樽商科大学では、2030年までに高等教育に触れられない道民をゼロにする「ユニバーサル・ユニバーシティ構想」を進めていますね。

穴沢 ユニバーサル・ユニバーシティ構想は、高校生を含めた地元からの進学者を支援する進学支援型、社会人を対象としたリカレント教育型、広く北海道民に高等教育を展開する教養教育型という3つの柱があり、2025年までに道内に10拠点を設置することを目指しています。進学支援型においては、高校卒業後に地元で就職した人が地域で働きながら社会人枠で大学に進学し、卒業資格を得られる制度づくりを進めているところです。地域にいながら講義が受けられることで人口減少の歯止めを期待できます。先ほど紹介した、各地の高校での出前授業もこの構想の一環として実施しているものです。広い道内で多くの人が高等教育を受けるには、大学自らが出向く新しい大学像が求められます。地域のリーダーとなる人材を育成し、人口減少など地域が抱える課題に対応できればと考えています。

三浦 最後に、北海道の未来を支える若者たちへメッセージをお願いします。

穴沢 皆さんは可能性の塊です。何事にも挑戦するのがアントレプレナーシップ。将来、会社をつくってもいいし、会社の中で新しいプロジェクトをしてもいい。世の中にあるサービスや商品は、誰かの小さなひらめきが具体化されて生まれたのだということに気づくのが、アントレプレナーシップの入り口だと思います。アントレプレナーシップ教育を通して、自分にもできるかもしれないという可能性を感じてほしいです。本学は、自ら考え、行動し、挑戦する人たちのきっかけの場であり、また背中を押す存在でありたいと思っています。

高校生が訪れたくなるエスコンフィールドHOKKAIDOは？

集客策をテーマに、エスコンフィールドで出前授業

アントレプレナーシップは、自ら課題を発見し、解決しようとする姿勢や能力のこと。小樽商科大学は、大学入学前からそうした考え方を身に付けてもらう狙いでイベントを開催しました。イベントの冒頭では、シークレットゲストとして2006年の第88回全国高校野球選手権大会で優勝した早稲田実業のエースで、元北海道日本ハムファイターズの斎藤佑樹さんが登場し、会場を沸かせました。斎藤さんは今までの野球人生で学んだことを挙げ、高校生に熱く語りました。

参加した高校生は、球場施設を見学した後に5人前後のチームに分かれ、同球場に高校生をより呼び込むための新たなサービスや商品についてアイデアを練りました。若い世代が何度も来たくなる球場には何が必要なのか、と真剣に話し合う高校生たち。それぞれが考え抜いたビジネスアイディアを審査員にプレゼンテーションしました。

最優秀に選ばれたチームは、菓子や記念品を作る体験や、日付の入る写真撮影スポットで思い出づくりを仕掛けるよう提案したほか、高校生など若い世代に交流サイト（SNS）で情報発信するサポーターになってもらう案も。本気度が伝わるプレゼンで、ビジネスとしての可能性が高いと審査員から絶賛されました。

ほぼ全チームが提案したのは高校生向けの学割制度です。修学旅行や体育祭など、学校関連のイベントの会場として団体を呼び込む案、テーマパークやゲームセンター、カラオケボックスを作る案、期間限定のスイーツを販売する案など、「野球好き」だけに頼らない集客を目指し、娯楽性を強めた球場にしていくことを提案したグループも多かったようです。

球場を運営する㈱ファイターズスポーツ＆エンターテイメント（FSE）の森野貴史執行役員事業統括本部ボールパーククリエーション統括部統括部長は、講評で「いろいろな部分に注目したアイデアがあり、とても参考になった。もっと多くの人に足を運んでもらえるようブラッシュアップしていきたい」と話しました。

参加した高校生たちからは「いろいろな人の考えに触れ、刺激になった」「大学や起業が自分に近い存在になった」などの声が聞かれました。

高校生アントレプレナーシップサミット in エスコンフィールドHOKKAIDO

OTARU UNIVERSITY OF COMMERCE
国立大学法人 北海道国立大学機構
小樽商科大学
〒047-0034 北海道小樽市緑3丁目5番21号
kouhou@office.otaru-uc.ac.jp
小樽商大 検索
PR